

2003年 1月10日

人間科学研究科委員長 殿

## 岸 太一氏 博士学位申請論文審査報告書

岸 太一氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2002年12月24日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

### 記

1. 申請者氏名 岸 太一
2. 論文題名 感情的共感と同化行動に関する研究
3. 本論文の主旨

本論文は共感性が意識や生理反応や随意反応の同化行動とどのように関連しているかを実験的に分析したものである。

#### 4. 本論文の概要

第1章ではまず同化行動の定義を行った。そして従来行われてきた同化行動に関する研究について、発達領域、社会領域、臨床領域の3つの領域から概観した。

各心理学領域における同化行動の研究を概観した結果を踏まえ、最後に感情的共感と同化行動との関連について概観し、同化行動に関しては感情移入や感情共有といった感情的共感との関連が指摘されていること、さらに他者との関係についてのメッセージを伝える非言語的ツールという役割についても指摘されていることを明らかにした。

第2章では第1章で論じられた点を踏まえ、同化行動と感情的共感との関連は実証的研究から導かれているのではなく、理論研究としてそのような指摘がなされている点を指摘した。さらに、現在の共感研究では共感を感情的側面と認知的側面の2つの側面を持つとしている点を挙げた。そこで、感情的共感と同化行動との関連についてデータに基づく検討を行なうことを本研究の目的とした。そして、感情的共感と同化行動との関連を自己認識・生理・行動の観点から検討することにより、感情的共感と同化行動との関連を明らかにしていく事とした。

第3章では、第2章で指摘された問題点を受けて、感情的共感と同化行動との関連につ

いて自己報告による検討を行った。研究Ⅰでは同化行動の因子構造モデルを構築し、感情的共感および認知的共感との関連を検討した。その結果、同化行動尺度は2因子から構成されることが明らかとなった。次にモデルの妥当性を検討した結果、モデルとしての妥当性を有する事が示された。そして、共感との関連については、「身振り同化」因子は感情的共感と弱い相関を持ち、「感情表出同化」因子は感情的共感との相関が高いことが示された。そして、両因子ともに認知的共感との相関が低いことが示された。

第4章では生理的側面から検討を行った。具体的には同化行動の指標として表情の同化を取り上げ、表情の同化と感情的共感との関連を検討した。研究Ⅱでは状態としての感情的共感と表情の同化の関連を検討した。快(smile)・不快(frown)の感情を表わすVTRをそれぞれ作成し、「VTR中の人物の感情を自分も感じるように見る」条件(感情的共感条件)と「ただ単にVTRを見る」条件(単純視条件)を設定した。そして、呈示中の大頬骨筋及び皺眉筋の活動電位を測定した。分析の結果、smile表情呈示に対しては、共感条件・単純視条件ともに大頬骨筋の活動電位が上昇し、皺眉筋の活動電位が減少した。そして、共感条件の方が単純視条件よりも変化が大きかった。frown表情呈示に対しては、共感条件で皺眉筋の活動電位が増加し、大頬骨筋の活動電位が減少した。これらのことから、状態としての感情的共感が生じているときには同化行動も生じていることが示された。そして、先行研究では他者の表情が呈示されただけで同化行動が生じているのに対し、本研究では一部異なる結果が得られた。

研究Ⅲでは感情的共感特性が表情の同化に与える影響について検討を行った。共感性尺度により事前スクリーニングされた被験者に対して、快(smile)・不快(frown)の表情を動画で呈示し、呈示中の大頬骨筋及び皺眉筋の活動電位を測定した。分析の結果、感情的共感特性が高い被験者はfrown表情呈示に対して皺眉筋の活動電位が増加し、大頬骨筋の活動電位が減少した。そして、smile表情呈示に対して大頬骨筋の活動電位が増加し、皺眉筋の活動電位が減少した。一方、感情的共感特性が低い被験者では活動電位の変化は認められなかった。

第5章では行動的側面からの検討を行った。研究Ⅳでは同化行動の指標としてclappingを取り上げ、clappingを行なうペアの感情的共感特性の高低による同化行動への影響を検討した。共感性尺度により事前スクリーニングされた被験者をペアにし、「速く叩く」条件と「ゆっくり叩く」条件の2条件を実験条件とした。分析の結果、「ゆっくり叩く」条件では両者のclappingの速度差は減少することが示された。さらに、感情的共感特性が高いペアは低いペアに比べてより速度差が減少することが示された。速度差の減少は両者のclapping速度が類似の速度になっていると判断されることから、1) clappingをゆっくりと行なう場合に同化が生じる、2) ペアの感情的共感特性が高い場合はより同化行動が生じやすいことが示された。

第6章では総合考察として、これまでの結果について要約し、再度本論文を構成する各

研究結果について概観した。その結果、感情的共感と同化行動との関連性について、それを支持するデータが得られたことを明らかにした。そして各研究結果を踏まえて、感情的共感と同化行動の関連について考察を行なった。感情的共感と同化行動には「取り入れ」という概念が共通して存在していることを指摘し、他者の行動を自己に「取り入れる」ことによって生じる同化行動と他者の感情を自己に「取り入れる」ことによって生じる感情的共感との関連性について論じた。

最後に、本研究に関する限界・問題点を指摘し、本研究の今後の展望について言及した。具体的には認知的共感と同化行動の関連、感情的共感と同化行動の因果関係を本研究の問題点として指摘した。

## 5. 本論文の評価

心理学の諸領域において、共感性と同化行動(他者と同一の反応をしてしまうこと)の間に関係があることが論じられているが、本論文ではこの議論を実験的に検証しようとした。

研究1では、まず意識のレベルでの同化行動と共感性の関係が調べられた。同化行動をどのように意識しているか調査し、その因子を調べたところ、2因子が抽出された。第1因子は身振り同化因子(身体動作で、しばらくして意識されるもの)、第2因子は感情表出同化因子(反射的に起こるもの)であった。既存の3種の共感性尺度と、上記の2因子との相関を調べたところ、両因子とも相関が見られたが、第2因子は第1因子より全体的に相関が高く、また共感性尺度の下位因子である感情的共感との相関が高かった。この結果は同化行動についての意識が共感性と関連していることを示したものである。また同化行動の意識面の分析でそれが二因子から成り立っているというこの結果は、今後の共感性の議論に寄与するものであろう。

研究2では同化行動を生理反応で見たものである。苦痛と喜びの表情を見たときの皺眉筋と大頬骨筋の活動を見たものであるが、特に相手の感情を感じないように教示したときに感情と対応した筋活動(苦痛では皺眉筋、喜びでは頬骨筋)が認められた。研究3では更に共感性尺度得点の高い者と低い者について、表情を見たときの皺眉筋と大頬骨筋の筋活動を比較したが、共感性の高低によって筋活動に差が見られた。表情筋と感情、表情筋と同化現象についての研究はすでに存在するが、共感や共感特性と表情筋の同化現象の関係を分析した研究はないことから、これらの研究は意義のあるものである。

研究4は同化行動を随意反応で見たものである。二人が自分の速度でゆっくりと拍手をするとき、そのスピードが次第に一致してしまう現象が同化行動であるが、共感性の高さによって、この現象がどのようになるか観察された。その結果、明らかに共感性の高い者の方が、同化行動の程度(二人のスピード差が小さい)が高かった。このような発想による共感性と随意反応の同化行動の研究は他になく興味深いものである。

本論文は共感性と同化行動に関する社会心理学や臨床心理学の分野における諸議論を展望して、共感性が同化行動を生ずるといふ説と同化行動が共感性を生むといふ説があることを整理し、いずれも論説にとどまっていることから、まず前者の論説を実験的に検証しようとしてはじめたものである。そして共感性尺度で計られる共感性と、意識、生理反応、随意行動といふさまざまなレベルにおける同化行動との関係を分析し、いずれの同化行動にも共感性との関係を実証することができた。共感性と同化行動に関する論説を、このように包括的に実証した研究は他にない。よって博士（人間科学）の学位を授与するに値するものと認める。

6. 岸 太一氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員 早稲田大学教授 文学博士（早稲田大学）

審査委員 早稲田大学教授 医学博士（東邦大学）

審査委員 早稲田大学教授 博士（医学）（東京大学）

審査委員 文教大学教授 教育学博士（筑波大学）

春木 豊

山崎 勝男

野村 忍

今野 義孝

